

第40号 平成 2 年 6 月 30 日

発行 者 群 馬 県 山 岳 連 盟
〒371 前橋市大手町1丁目1-1
群馬県庁観光課内
TEL (0272) 23-1111 委員会
編 集 群 馬 岳 連 編 集 順 一
責任者 羽 野 順 一
印刷 所 森 田 印 刷
<定価 1部 100円>

新年度 岳連に期待する



群馬県山岳連盟顧問
参議院議員

中 曾 根 弘 文

昭和六十三年七月、群馬県山岳連盟の総会で顧問とさせて頂いた。それから早くも二年が経過した。その二年間に山を取り巻く国の施策や群馬岳連の環境も大きく様変わりしてきている。

国の施策でも、物質万能主義への反省から、心の豊かさが見直されつつある時代へと変化していることが反映されてきている。

現在、国内には二十八の国立公園(計「百四万」)、五十四の国定公園(百二十九万)、三百の都道府県立自然公園(百九十九万)があり、国土の十四%を占めている。

昨年の五月に、環境庁の自然環境保全審議会自然公園部会・利用のあり方検討小委員会、国立公園などの自然公園の利用のあり方について提言している。その中で国民の間には自然保護の強い声がある一方、余暇増大から山野に接したいとする要求が高まっていると分析している。また、自然を損なわない「持続の利用」を原則にしつつ、一定の地域に限定してスポーツや保養も受け入れるべきだと提言している。

具体的には、一つの公園を自然状況に応じていくつかの地域に分けて、「野生体験型」「(原生的な)自然が残され、利用者は徒歩で回る」、「自然探勝型」「(比較的の自然が残され、拠点までは乗り物で行けるが、中心部は徒歩)」、「風景観賞型」「(古くから温泉地などとして親しまれている)」、「自然地保護型」「(自然の程度が比較的低く滞在型ホテルやスポーツ施設も認める)」に四分類するよう求められており、環境庁は地元などと協議して、四年以内に分類作業を完了するとしている。

群馬県でも、国土庁をはじめ六省庁からなる大規模リゾートの指定が、昨年十一月に行われたが、首都圏の奥座敷として脚光を浴びており、余暇時間の増加とともに山岳レジャーのメッカとしての役割も増大している。

群馬岳連としても今後ますますその活動範囲が広がることになろう。

登山ということばの響きには、「神聖なもの」、「崇高なもの」という感じと、「辛い」、「苦しい」という面があるように思う。

実際にその両者を備えたものが登山であろう。しかし、最近では「辛い」、「苦しい」ということは敬遠される傾向にあり、一般の人には、山登り、ハイキング、フリークライミングなど、「ファッションとしての山」、「楽しく行ける山」、「スポーツからレジャーとしての山」に人気が集まっている。

どちらが正しくて、どちらが間違っているという問題ではなく、裾野の広がり、山に関心を持つ人々が増えていると喜ぶべきだと考えている。また、年齢的には、二十年ほどで中高年者の登山が目立ち始めていると聞く。「汗を流して登らなくてもサーフィンの方がおもしろい」などと、若い人の山離れが進んでいる一方で、定年を迎えた中年層の人が、昔の思い出をよみがえらせて山歩きを再開するケースが増えているという。

一般の人が考える登山というものには、何か特殊なスポーツ、自分達が参画できないスポーツという感じを持っているように思う。もっと身近で、誰でもできるといふことをアピールしていく必要があるのではないだろうか。

とにかく「山はすばらしい」といっても、やはり百聞は一見に如かず、山の魅力というものに接し、自ら山を体験してもらったことが第一歩になるのではないだろうか。その意味からも、今年度で十四回目を迎える県民登山大会など、一般の参加者を多く募っていくことは大いに意義のあることと考えている。そして、一般の人を対象とした催しの中から多くのお出合いを作り、地域の横のつながりを広げ、裾野の広がりを作っていく必要があろう。今年も成功することを期待している。

山に登る人の増加とともに、「紅葉狩り」でにぎわう北アルプスでの突然の大量遭難死。標高三千m級の山では十月に入れば天候の急変や時ならぬ降雪があるのは登山家ならば、常識。しかし、観光ルートの開発で手軽になった北アルプスはいま「ザンダルバ」と冬山の境界線上にあり、今回の事故は身近になった。日本の屋根が引き起こした悲劇ともいえる(毎日新聞・八九・一〇・九)など、遭難の記事も目につくようになった。市販のガイドブックにも遭難したコースは「技術的に問題はなく、気楽なコース」と解説しているところである。

どんな登山にも遭難はついてまわる。山の楽しみ方の教科書・参考書ともいふべき「群馬の山」全三巻の刊行をみたが、群馬岳連による指導活動や遭難救助活動も好むと好まざるにかかわらず、質量ともに増大していくのではないだろうか。

私が顧問となつてから、山田昇さん・三枝照雄さんがマッキンリー遭難するなど、何ともいえない悲しい出来事があつたことは、無念でならない。

昨年三月に私がコーディネーターを務める群馬テレビの「はつらつ群馬二〇〇一年」という番組で、山の魅力やこれからの抱負などを語っていたとき、一般の人にも山を素晴らしさを理解してもらおうと、マッキンリー登頂を終え、冬の五大最高峰初登頂という偉業を達成し、ソ連のエルブルスに行く途中、一時帰国のときに対談しようとした山田昇さんをお願いしていた。収録日も決め、後は帰国を待つだけとなつてた矢先、マッキンリーからの知らせは「遭難したのでは?」という考えられないものになつてしまった。

それから数日後、遭難が現実のものとなり、企画していた番組も六月に、山田昇さん・三枝照雄さんの追悼番組になつてしまつたとは夢にも考えられないことだつた。今年、フランスのモリス・エルゾグ氏が一九五〇年に世界で初めて八千を超え、アンナプルナ(八〇七五)登頂に成功して四十年目に当たる。

田実、ヤルカン初登頂の上田豊の各氏のはか、女性でエベレスト初登頂の田部井淳子さんの四人が招かれており、世界最高峰の登頂に成功した各国の著名な登山家が一堂に会して、自然・環境破壊が深刻化するヒマラヤを守るため、全世界の人々に協力をお願いかける「アビール」を出したそう。

山田昇さんも三枝照雄さんもさぞかしこの記念祭に参加し、ヒマラヤの環境保護の問題や、今後の山への情熱を募集した登山家たちからあつたことだろう。

この遭難で、群馬岳連の海外遠征は暫くの間「足踏み状態」になつていて聞いているが、各人が山登りの実践を通じて実力を蓄え、来るべきときに備えていたのだと切望するとともに、群馬岳連が、世界に通用する登山家を育成する土壌を絶やすことなく、保ち続けていくことを願っている。

また、山田昇記念杯が今年度からスタートするが、登山の啓蒙、普及、発展の一助として、県内外の多くの登山を志す人に参加していただき、大いなる成功をおさめてほしいと考える。

「山高きが故に貴からず」といふものの、スポーツは「より高く」「より速く」「より遠く」が原点だと思ふ。さらに登山は「より困難に」挑戦することも加わるだろう。

群馬岳連が山岳人口の裾野を広げることばかりに力を入れている、ハワイのキャラウェイ山のよう(次頁につづく)



うに偏平な岳連になってしまふ。ことだと思ふ。しかし、ひとつひまた、超然として一般の人を寄せ、困難に挑戦し続けていくことが山に対する一般の人の理解を得る必要とされているのではないだろうか。

群馬岳連として、山登りに対する裾野を広げつつ、山田昇さんのような世界的クライマーを生み出したが、今年度の群馬岳連の太していくことは大変難しく、いなる活躍に期待したいと思う。

▲向って右より中曽根参議院議員、星野会長、八木原 園明理事、宮崎勉理事。

星野会長再選

平成二年度岳連総会開催

三副会長、監事、事務局長も再選

平成二年度群馬県山岳連盟総会が、平成二年六月十日(日)群馬県婦人会館に於いて開催された。

総会に先立ち、理事会が開催され、その席で会長、副会長、監事、事務局局長及び、事務局員の役員改選について話し合いが行なわれ、会長に星野光氏、副会長に中島喜代志氏、小林三雄氏、石井謙一郎氏、監事に北村登男氏、堀江登志夫氏、事務局局長に女屋等志氏、事務局員に千明政彦氏の各氏が前年度に引きつづき推選され、総会の席で承認され、平成二年度よりスタートを切ることが決定した。尚、理事長、副理事長、常任理事、理事等の役員改選については七月の理事会で協議され決定される。

総会は、前記のように開会のあと会長及び副会長が理事会の推選のとり承認決定され、星野会長の挨拶があり、その後、中曽根弘文顧問の挨拶があつてから議案審議に入り、平成元年度事業報告及び、収支決算報告が女屋事務局長より説明報告があり、監事の北村、堀江両氏の監査報告とつづきこれを承認。次いで平成二年度事業計画案及び予算案が発表される。新年度の事業計画案の中で特に注目されるのは、今年度より、山田昇記念杯登山競争大会の開催が九月三十日(日)武尊山に於いて行なわれる。又、県民登山大会も前年につづき十月十四日(日)武尊山に於いて開催される予定、その他、遭難防止活動、国体への参加と選手強化、ゴミ持ち帰り運動等の美化運動、岳連会報「嶺」の発行、海外登山では第五次岳連海外遠征登山として、冬期エレベスト南西壁登山計画の推進、平成三年度版山岳写真カレンダーの作成販売等の盛況山の事業が計画されている。

その他群馬岳連に参与をおくことと承認され、その規定案が検討された。参与の年令は六十才以上、又年会費については五千円程度ということ等が決定したがその他については理事会で検討し、正式に規定を作ることで承認された。

次いで監事、事務局長、事務局員の役員が理事会の推せん通り、会長により選任された。総会後希望者により懇談会も開かれ、日頃あまり顔を見せない人達も参加し、なごやかで楽しいコミュニケーションの場となり、新年度の岳連活動が増々活発に発展することを祝して、総会、懇談会を無事終了した。

平成2年度群馬県山岳連盟行事一覧表

月	総務部・自然保護部	編集部	遭難対策部	指導部	海外登山部	国体部	事業部	その他
4	11 理事会		22 新隊員訓練(裏妙義)			8 日山協国体委員総会 14~15 県民体育大会2部 山岳競技会(標名山)		
5	9 理事会 20 日山協総会(東京)		20 一般対象講習会 (裏妙義)	13 雪上技術講習会 (谷川岳) 指導員総会				12~14 県高校総体 (標名山)
6	1~3 全日本登山体育大会 9 環境週間・尾瀬ゴミ持 帰り 10 理事会・総会	額呂40号発行	23~24 日山協遭難対策研 究会議(新潟県長岡市)	3 岩登り技術講習会 (黒岩) 10 日山協指導委員総会 26 読図講習会	9~10 日山協 海外委員総会 (東京)		平成3年度 カレンダー 写真締切	
7	1 谷川岳安全登山の日 11 理事会 28~29 尾瀬ゴミ持帰り運 動		1 隊員訓練(谷川岳)	10 登山教室 15 登山教室		20~22 国体関東地区大会 (東京都・奥多摩郡)		
8	8 理事会			26~27 指導員研修会 (川場村)			印刷仕上がり1600部	1~5 全国 高校総体(宮 城県・蔵王)
9	12 理事会 29~30 全国健康福祉登山交 流 30 山田昇記念杯登山競争 大会	額呂41号発行			ジャパン・カ ップ		12 各山席 会へ配布	
10	11 理事会 14 第14回県民登山大会 (川場村)		7 隊員訓練(武尊山)	14 登山教室		20~25 第45回国体 (福岡県)		
11	14 理事会 標名山黒岩清梯 関東地区岳連連絡協議 会			10~11 ロック・フェス ティバル				
12	12 理事会	額呂42号発行	11 冬山合宿検討会 (奥体協会館)					
1	9 理事会		22 冬山合宿報告会 (奥体協会館)					
2	13 理事会 17 日山協評議員会			3 氷雪技術講習会	23~24 日山協 海外技術研究会 (八王子)			
3	13 理事会 24 日山協理事会	額呂43号発行	3 隊員訓練(谷川岳) 平成2年度年度隊員結 団式	10 雪上生活技術講習会 (谷川岳)				26~29 高体連リーダ ー講習会

山田昇記念杯を行なうにあたって

理事長 田中成幸

○大会の意義

昨年の二月、日本人では初めてのヒマラヤ八〇〇米峰十四座完登を目指していた山田昇は、三枝照雄、小松幸三らと共に、極北のマッキンリー峰に近づきつつあった。私達の群馬岳連、いや日本の登山界にとって、非常に残念なことであった。彼の初めての八〇〇米峰の登頂であった、ダウラギリ峰での仲間だった私にとっても、痛恨の極みであった。遭難、遺体搬出に関しては、岳連傘下の皆様をはじめ、県内外の大勢の善意のもとに、彼等をご遺族のもとにお返し出来たことは、悲しみの中にも、心が安らぐ思いがした。

彼等三人の追悼行事が一段落した、昨年十月の理事会に於いて、山田昇の業績を賛え、後世に彼の名を残し、彼に続、若い人達を育てるためにも、基礎体力を競う登山競走大会を行うことに決定した。又、一般の人達にも、大会に参加して、縦走競技を目の前で見てもらい、自らも上州武蔵山の良さを体験してもらおう趣旨である。

○競走方法
登山者の中には、ヒマラヤ登山を目指し、冬山指向の人もあり、又、クライミング専門の人、沢登りに生き甲斐を持つ人達もいる。いずれにしても、自然の中で幾日

別な意義のある登山を、考えねばならないだろう。次回には、選手として参加する様な人達が出てくれば頼もしい。証明書の発行や、長年続けた参加者には、賞状のようなものを配慮したい。登山を競技として考えた場合、相手は自然であることから、主催者側は何よりも安全を第一として考え、計画と準備を万全にするが、天候やその他自然に對して、行方不明の私達、そして選手、一般参加者の体の不調など、考えを行かねばならないだろう。

○運営方法

大会を行うには、資金面の問題もある。ポスターやプログラム、カップやトロフィー、全コースの安全確保のための医療、通信などの備品、毎年必要となる資金の捻出が必要である。岳連の予算の中からでは、それほど望めないだろうし、所属団体が、一社でも良いから協賛広告をとり、プログラムを活用すればよいだろう。地元にもあまり負担を掛けたくないよう、私達岳連の大きなイベントとして行うのだから、前向きな姿勢で取り組む。初めての試みなので、色々問題も出てくるだろう。話し合いの上で、悪い所は見直し、良い所は残して、より完全に近づくよう、やっていくつもりだ。この大会が長く続き、山を登る人達の中で、山田、三枝の名前が、忘れられずに残ってくれば、主催者の一人として幸甚である。

○一般登山者の参加
この大会は、登山の啓蒙と普及も、同時に考えられた。競技のコースの他に、一般登山者のコースを設定して、登山を楽しみながら、競技も見てもらおうのである。大会では、安全が第一に考えられ、全コースに、通信部、医療救護部などの若い役員が、大勢入る。一般の参加者も、当然、安全は確保される。その上で、県民登山とは

山田昇を中心として

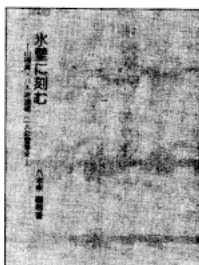
発行された本の紹介

「史上最強の登山家
山田昇」 読売新聞社編

表紙のタイトルに不世出のクラマー全記録。世界の八〇〇米峰十四座の完全登頂をめざし、すでに九座を手中にしなが、マッキンリーに近づいた日本登山史上最強の登山家・山田昇・その人と山歴のすべてがここにありと記してある。

「氷壁に刻む」
山田昇・八木原國明二人の登山史 八木原國明著
内容は「二人の出会い」から「ヒマラヤへの道程①②」「八千メートルの世界」「山田昇、マッキンリーに近づく」の第二章から第五章でまとめられ、八木原國明と山田昇との出会いから別れまでがいかにも著者らしい感覚で書かれている。

一九九〇年一月十日上毛新聞社発行。B6判。二四十二頁



「八〇〇メートルの勇者たち」
ヒマラヤニスト・山田昇とその仲間足跡 八木原國明著

内容は「氷壁に刻む」と少々異なり、山田昇を中心としてその仲間との出会いと山行をドキュメンタリーに書かれている。特に群馬岳連を中心とした県内の山岳人の記録が克明に記されているのはやはり著者の群馬を愛する表われか。

一九九〇年五月一日、山と溪谷社発行。B6判。二百四十頁。定価一三〇〇円。



「極北の烈風に死す」
遭難対策本部編

内容はマッキンリー山田昇の遭難のすべての記録が集約されている。最初にマッキンリーのカラー写真があり、一、鎮魂のオーロラ、二、悲劇を乗り越えるために、三、マッキンリー登山資料、四、謝辞に代えて、等の四部に別れ、遭難の原因を探究しているものが中心となっている。この報告書のとがきで「この事故を機に若い岳人たちが冬期マッキンリーに挑み、さらに多くの高峰登山に立ち向うときの一助とすべくマッキンリー峰に関する資料を加えるなど、最善をつくしたつもり」と山森氏が書いているようにマッキンリーに関する資料としても貴重な報告書と思う。

一九九〇年六月二十五日、東京新聞出版局発行。B5判。二百一頁。定価一九五〇円。



技術と信用で地域社会に貢献する
総合建設業

株式会社 萬屋建設

取締役会長 星野光

本社 群馬県沼田市下町880番地 TEL 0278(23)4648(代表)
支店 東京都豊島区東池袋4-2-7 TEL 03-985-7631

岳連部会報告

登山指導部

事業報告

〇雪上技術講習会

平成元年四月二十三日、谷川岳マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは高田政美、佐藤緑、松田龍彦、

参加者十六名。内容は、雪上歩行、

アイゼン歩行、滑落停止の実施技

術講習を行う。

〇雪上技術講習会

平成元年五月二十一日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは町田幸男、高田政美、竹山繁

男、参加者十五名。内容は残雪期

の危険性、雪溪の構造等の説明と

滑落停止、スタンディングアック

スビレイの練習を行う。

〇日山協指導委員会総会

平成元年六月四日、岸記念体育

会館。参加者、日山協指導常任委

員十名、他参加者十六名。内容は

各岳連、協会の指導委員会六十三

年度事業報告、及び平成元年度事

業計画、文部省社会体育指導等に

ついて。

〇岩登り講習会

平成元年六月四日、榛名山黒岩

にて開催。コーチ、町田幸男、柳

原重之、佐藤緑、小暮文彦、後藤

文明。参加者十三名。初級では

三点支持、装備の名称と使い方。

〇リーダー講習会

平成二年三月二十六日より三泊

四日。尾瀬アヤマ平周辺。コチ、

高体連登山部顧問、名塚秀二、佐

中級はアンザイレンの組み方、ビ

レーポイントの取り方、確保、ア

ップザイレン、ビレービンの打ち

方、装備の強度と使い方に関する

応用等について実演と説明。

〇天気図講習会（机上）

平成元年八月二十三日、会場は

群馬体協会館。講師、村上泰賢（

高体連）、参加七名。内容は天気

記号の初歩から等圧線の書き方の

初歩まで。

〇氷壁技術講習会

平成二年二月四日、吾妻郡六合

村、滝見ドライイン付近。コチ、

堀越、原田、樋口、高田。参

加者十八名。内容は初心者と中級

者に分け、支点の取り方（スクリ

ュー、スナーク打込み）と登攀の

指導。

〇雪上生活技術講習会

平成二年三月十一日、谷川岳

天神平スキー場周辺。コチ、田

中成幸、高田政美、佐藤光由、町

田幸男、参加者十七名。講習内容

はワカンの歩行とその各部名称と

はき方、ワカンでのラッセルの方

法、山スキーのはき方と登高法、

雪洞の掘り方、イククル作成等を

行う。

〇海外登山部

アンナブルナで斎藤、小林君を

失ない、昨年のマツキンリーでの

山田、三枝君の遭難死、と一年少

々の間に残念な事故が相次いでし

まった。誠に申し訳なく思ってお

ります。

年度で言いますと昭和六十六年

度には発生したマツキンリー遭難の

後始末が平成元年度まで続き、海

外登山研究会としての活動は相当

に停滞した。

元年六月十一日の（神戸市

の六甲山）日山協海外委員総会と

遭難研修会には八木原、名塚が出

席し、八木原がマツキンリー事故

の報告をし、翌日の東京の「マツ

キンリー遭難の報告と三君を偲ぶ

会」主催のために、二日目は欠席

した。

昨年度のヒマラヤ登山の実施は

ソ連の天山山脈のハンテングリ（

七〇〇〇）に小西浩文、弥野光

一による群馬ミヤマ山岳会隊が八

月六日に登頂。

二つ目は名塚秀二（前橋山岳会）

と好子（群馬登山会）夫妻が秋冬

のヒマラヤ同人数（神奈川）のマ

ナスル（八八三）マカール

（八八四）の連続登山に参加

したが、マナスルの七四〇〇付

平成二年年度の研究会総会では六

月

末に行う予定であるが、懸案の「

冬期エベレスト南西壁」登山計画

の推進等を議題とすることになっ

ている。（以上 八木原昭明）

事業部

事業報告

〇雪上技術講習会

平成元年四月二十三日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは高田政美、佐藤緑、松田龍彦、

参加者十六名。内容は、雪上歩行、

アイゼン歩行、滑落停止の実施技

術講習を行う。

〇雪上技術講習会

平成元年五月二十一日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは町田幸男、高田政美、竹山繁

男、参加者十五名。内容は残雪期

の危険性、雪溪の構造等の説明と

滑落停止、スタンディングアック

スビレイの練習を行う。

〇日山協指導委員会総会

平成元年六月四日、岸記念体育

会館。参加者、日山協指導常任委

員十名、他参加者十六名。内容は

各岳連、協会の指導委員会六十三

年度事業報告、及び平成元年度事

業計画、文部省社会体育指導等に

ついて。

〇岩登り講習会

平成元年六月四日、榛名山黒岩

にて開催。コーチ、町田幸男、柳

原重之、佐藤緑、小暮文彦、後藤

文明。参加者十三名。初級では

三点支持、装備の名称と使い方。

〇リーダー講習会

平成二年三月二十六日より三泊

四日。尾瀬アヤマ平周辺。コチ、

高体連登山部顧問、名塚秀二、佐

藤光由。参加者は高体連生徒。ワ

カンの講習、歩行技術、読図、雪

洞講習、その他尾瀬戸倉から富士

見小屋アヤマ平附近の登頂。

（以上 高田政美）

ソ連人登山家によるカンチエン

ジュンガ縦走を始めとする高峰登

山の報告と、UIAA（国際山岳

連盟）の遠征委員長のジャン・コ

ードレイ（仏）、ブルノ・ラング

ウィラー（スイス）、ナジール・

サビル（パキスタン）と四ヶ国・

九名の外国人高峰登山家を迎えて

開催された。

外国人登山家に接し、一緒に飲

んで、彼等の強さと人なつこさ

を知った。

平成元年度の研究会総会では、

第五次岳連隊のヒマラヤ登山とし

ての「冬期エベレスト南西壁」登

山計画についての検討がされた。

名塚、佐藤からは九一〇二年

の冬に実施することにし、その成

功のための方策をたてる、という

意見が出された。新田安紀方医師

からは「そのためには県外からの

補強も考えたかどうか」という意

見も出たが、結論を出すには至ら

なかった。

とにかく、エベレスト南西壁と

冬期ヒマラヤ登山の研究をするこ

ととし、文献集めに入った。

日山協等が提唱したネパールの

タンポチエ僧院再建への寄付は田

中壮佑（二万）、太田山岳会（一

万）、八木原（二万）の計四万円

を送った。

平成二年年度の研究会総会では六

月

末に行う予定であるが、懸案の「

冬期エベレスト南西壁」登山計画

の推進等を議題とすることになっ

ている。（以上 八木原昭明）

〇雪上技術講習会

平成元年四月二十三日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは高田政美、佐藤緑、松田龍彦、

参加者十六名。内容は、雪上歩行、

アイゼン歩行、滑落停止の実施技

術講習を行う。

〇雪上技術講習会

平成元年五月二十一日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは町田幸男、高田政美、竹山繁

男、参加者十五名。内容は残雪期

の危険性、雪溪の構造等の説明と

滑落停止、スタンディングアック

スビレイの練習を行う。

〇日山協指導委員会総会

平成元年六月四日、岸記念体育

会館。参加者、日山協指導常任委

員十名、他参加者十六名。内容は

各岳連、協会の指導委員会六十三

年度事業報告、及び平成元年度事

業計画、文部省社会体育指導等に

ついて。

〇岩登り講習会

平成元年六月四日、榛名山黒岩

にて開催。コーチ、町田幸男、柳

原重之、佐藤緑、小暮文彦、後藤

文明。参加者十三名。初級では

三点支持、装備の名称と使い方。

〇リーダー講習会

平成二年三月二十六日より三泊

四日。尾瀬アヤマ平周辺。コチ、

高体連登山部顧問、名塚秀二、佐

藤光由。参加者は高体連生徒。ワ

カンの講習、歩行技術、読図、雪

洞講習、その他尾瀬戸倉から富士

見小屋アヤマ平附近の登頂。

（以上 長谷川 勇）

〇雪上技術講習会

平成元年四月二十三日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは高田政美、佐藤緑、松田龍彦、

参加者十六名。内容は、雪上歩行、

アイゼン歩行、滑落停止の実施技

術講習を行う。

〇雪上技術講習会

平成元年五月二十一日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは町田幸男、高田政美、竹山繁

男、参加者十五名。内容は残雪期

の危険性、雪溪の構造等の説明と

滑落停止、スタンディングアック

スビレイの練習を行う。

〇日山協指導委員会総会

平成元年六月四日、岸記念体育

会館。参加者、日山協指導常任委

員十名、他参加者十六名。内容は

各岳連、協会の指導委員会六十三

年度事業報告、及び平成元年度事

業計画、文部省社会体育指導等に

ついて。

〇岩登り講習会

平成元年六月四日、榛名山黒岩

にて開催。コーチ、町田幸男、柳

原重之、佐藤緑、小暮文彦、後藤

文明。参加者十三名。初級では

三点支持、装備の名称と使い方。

〇リーダー講習会

平成二年三月二十六日より三泊

四日。尾瀬アヤマ平周辺。コチ、

高体連登山部顧問、名塚秀二、佐

藤光由。参加者は高体連生徒。ワ

カンの講習、歩行技術、読図、雪

洞講習、その他尾瀬戸倉から富士

見小屋アヤマ平附近の登頂。

（以上 長谷川 勇）

〇雪上技術講習会

平成元年四月二十三日、谷川岳

マチガ沢S字付近にて開催。コ

チは高田政美、佐藤緑、松田龍彦、

参加者十六名。内容は、雪上歩行、

アイゼン歩行、滑落停止の実施技

術講習を行う。

〇雪上技術講習会

平成元年五月二十一日、谷川岳